

『今月の天候と農作業』

通巻第5708号
2月号
令和8年1月29日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

向こう1か月程度は、降水量の少ない状態が続くでしょう。

【予報のポイント】

低気圧の影響を受けにくいいため、向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

昨年11月中旬以降、低気圧の影響を受けにくく、降水量の少ない状態が続いています。向こう1か月程度も降水量の少ない状態が続くでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	50	30	20
日照時間	九州南部	20	40	40

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。降水量は、少ない確率50%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 1月29日(土)～ 2月6日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<2週目の予報> 2月7日(土)～ 2月13日(金)

低気圧の影響を受けにくいいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 2月14日(土)～ 2月27日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

1 スクミリングガイ対策

スクミリングガイ（ジャンボタニシ）対策では、厳寒期の耕うんが効果的です。発生ほ場では、トラクターの走行速度を遅くし、ロータリーの回転数を上げると、殺貝効果が高まります。

2 播種と出芽

浸種は発芽揃いを良くするために水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度を目安に行います。水温10℃以下の低温を避け、夜間の冷え込みにも注意しましょう。浸種後に、30℃～32℃で24時間の催芽を行います。

播種量の目安は、稚苗では1箱当たり催芽粃180gです。

3 緑化と硬化

出芽後は、1葉目の本葉が展開し、2葉目が抽だいするころまで寒冷紗等で遮光します。昼間が25℃以下、夜間が15℃以上の温度で管理しましょう。

硬化時の温度管理は、昼間が20℃以下、夜間が10℃以上とし、後半は外気に慣らします。かん水は床土の温度を下げないように午前中に行いましょう。

◆ムギ類

1 穂肥

月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では2月中旬に10a当たり窒素成分で2・5kg、加里で2kg程度を施肥します。

2 土入れと排水対策

土入れは肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒効果があるため、節間伸長期前までに行いましょう。排水対策として、ほ場の周囲や条間を作溝します。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆共通事項

日中の温度確保や、内幌カーテンの開閉による日射量の確保を行い光合成を促進します。また、午前中の内幌カーテンの開閉は、ハウス上部の空気が十分に暖まってから数回に分けて行います。同時に、植物の結露が多い場合は、病気の発生を予防するために、早朝の加温時間や谷換気の開閉幅などの設定を見直しましょう。

また、日射量が徐々に多くなり、葉からの蒸散量が増えるため、灌水不足に注意しましょう。

◆きゅうり

促成のつる下ろし栽培では、「心止まり」になりやすいため、開花節位は生長点から3、4節目を目標とし、開花節位が上がった場合には摘果を行うとともに夜間の設定温度を上げて、草勢維持に努めます。

◆ピーマン

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝は2、3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。開花節位が上がった場合は、こまめな収穫を行うことで着果負担を抑えます。

◆トマト類

果実肥大と着色促進及び食味向上のために、日射量と1株当たり15～18枚程度の葉数を確保します。また、早朝の結露で裂果が発生しないように、早朝の加温や換気による除湿を行います。

◆いちご

曇天が続く場合は、成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなるため、裂果等の品質低下の防止と、着色促進のために夜温をやや高めに管理します。また、大玉果や食味向上のため裾玉を摘果します。今後、ハダニが増加しやすい時期になるために、古葉や収穫の終わった果梗はこまめに除去し、定期的に薬剤散布を行います。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆共通事項

播種や定植を行う品目では、発芽や活着を促すために、適切な土壤水分の確保が重要です。土壤が乾燥している場合は、スプリンクラーなどによりかん水をしましょう。

◆食用かんしょ

トンネル栽培の定植時期です。苗の徒長を防ぐために、採苗の10日前頃から苗を外気温に当てて管理します。

サツマイモ基腐病や茎根腐細菌病を育苗ほ場から栽培ほ場に持ち込まないことが重要です。育苗ほ場では、発病株を見つけたら速やかに抜根処分をします。また、苗を切り取る高さは地際から5cm以上とし、切り取った苗は薬剤で消毒します。なお、薬液は処理当日に調整したものを使用しましょう。

苗は採苗後すぐに定植するよりも、数日間取り置きすると定植後の活着が良くなります。また、地温(18℃以上)を確保するため、定植の前日からトンネルを密閉しましょう。

◆さといも

早生品種の定植時期です。連作障害を回避するために、さといもを4年以上栽培していないほ場を選びましょう。

種いもは、病虫害や芽つぶれ等が無く、30～50g程度のものを使用します。疫病対策として、種いもは選別後、しっかりと水で洗浄した後、薬剤による種芋消毒を行います。また、本ぼの土壤消毒は、センチュウや乾腐病に効果のある薬剤で行います。

◆ほうれんそう

露地栽培では、気温の変化や降雨により、生育障害(茎折れや葉の白化・黄化等)が発生しやすくなります。また、気温の上昇と降雨により病虫害の発生が増加するため、適期に防除を行いましょう。

(倉永 泰代)

果樹

1 常緑果樹

◆完熟きんかん

出荷の最盛期を迎えます。厳寒期を過ぎると気温が徐々に上がり、過熟やうるみ果の発生が懸念されます。ハウス内の温度は昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように管理します。完熟果実は衝撃に弱いいため、過度の積み重ねを避けるなど、丁寧な収穫・出荷作業を徹底しましょう。

◆マンゴー

早期出荷の作型では、摘果の時期です。果実の縦長が5cm程度になったら、最終的に結果枝2、3本に対して1果となるように摘果します。また、厳寒期を過ぎると、夜間の外気温が徐々に上がるため、あざ果症の発生に注意が必要です。早朝や日の出後に果実に結露が生じないように、ヒートポンプの除湿設定やこまめな早朝の換気により湿度を低く保ちましょう。

後期出荷の作型では開花期を迎えます。夜間の十分な加温や早朝の換気を行うことで湿度を低く保ち、軸腐病などの発生をしっかりと抑えます。花穂をひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。灰色かび病に対する微生物殺菌剤の活用も有効です。

2 果樹全般

◆有機質の投入と土壌改良

高品質・高収量を実現するためには、土壌の通気性の確保が重要です。完熟たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌の通気性の改善を行います。

土壌の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、必要に応じて石灰質資材で調整しましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆電照ギク

2、3月出荷作型は最も暖房コストがかかるため、それぞれの品種・系統に適した夜間の変温管理を行い、コスト削減に努めます。

また、ハウス内の湿度が高くなると白さび病が発生しやすくなるため、換気による除湿や循環扇の活用、農薬の予防的散布などの対策を行います。

◆スイートピー

日長が長くなるにつれ、蒸散量や養分要求量が増加します。かん水及び施肥を適切に行い、草勢低下を防ぎましょう。

また、花シミの発生が増加する時期となります。花シミの発生は水滴の付着が要因である場合があるため、換気による除湿や循環扇の活用等により結露防止に努めます。

◆ホオズキ

地下茎の植え付けを開始する時期です。

病害虫をほ場に持ち込まないために、健全な地下茎の選別・調整をしっかりと行います。また、必要に応じて植え付け前に地下茎の消毒を行きましょう。

◆トルコギキョウ

天候不順時には、ブラスチングやチップバーンが発生しやすくなります。生育後半の過剰施肥を控えるとともに、不要な枝や蕾の整理、カルシウム剤の葉面散布等により発生軽減を図ります。

◆ラナンキュラス

収穫量が徐々に増加してくるため、草勢低下を防止するための液肥を定期的に施用します。

また、ハウス内温度が低すぎると、光合成量が減少し、収量に影響しますので、日中の温度管理は15℃程度を目安にします。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

高病原性鳥インフルエンザは、令和8年1月16日現在、宮崎県を含む全国の養鶏場で16事例の発生が確認されています。

また、県内における野生イノシシの豚熱（CSF）感染事例は67例にのぼり、畜種を問わず、ウイルスの侵入リスクが非常に高い状況となっています。

農場を守るため、再度、防鳥ネットや防護柵に隙間や破損がないかを点検し、野生動物や野鳥の侵入を防ぎましょう。また、日頃から健康観察をしっかり行い、異常が見られた場合には、速やかに家畜保健衛生所に通報しましょう。

◆家畜

依然として寒さが厳しく、乾燥する日が続いていますが、季節外れの暖かい日もあり、いつも以上に細やかな畜舎の温度管理が必要です。

特に、幼畜は温度変化に弱いため、細心の注意を払いましょう。子牛の部屋は、直接風が当たらないよう、コンパネやシートで囲い、コルツヒーター等の保温器具も活用して、防寒対策を徹底しましょう。

また、腹部が冷えると下痢の発生や、それに伴う発育の低下を招きます。敷料は厚めに敷き、こまめな交換を意識して、乾燥したきれいな状態を保ちましょう。

ただし、乾燥しすぎると、呼吸器病の原因となる埃や塵が舞いやすくなります。埃が気になる時は、細霧器等を使用して加湿を行い、畜舎内が乾燥しすぎないように留意しましょう。

◆飼料作物

早い地域では、翌月から秋冬作の収穫・調整作業が始まります。収穫適期は圃場全体の50～60%程度が出穂している時期（出穂期）です。適期を逃さず、栄養価が高い良質粗飼料の確保に努めましょう。

また、飼養管理に影響がでないよう、計画的な作業に向けて収穫機械等の点検を行いましょう。

（長瀬 朋子）

特用作物

◆茶

1 春肥の施用

春肥は、一番茶を始め二・三番茶の収量及び品質の向上のために重要な肥料です。

2月上旬頃から2、3回に分けて地域の基準に準じ、畦間全面に幅広く散布します。施用後は根を傷めない程度に軽く混和しましょう。樹勢の低下が見られる場合は、春整枝後に液肥を3回程度散布すると樹勢回復に効果があります。

2 春整枝の実施

春整枝の時期は平均気温10℃になった頃が目安です。平坦地では2月下旬から、山間地では3月上～中旬頃に実施しますが、一番茶の摘採時期が集中するのを避けるため、品種の早晩生や地域の微気象等を考慮し整枝時期を調整しましょう。その際は天気予報を確認し、整枝直後に急激な低温に当たらないよう注意してください。

整枝の高さは、葉層を8cm以上確保した上で、最終摘採位置から3～5cm高い位置が目安ですが、秋整枝を実施した茶園では、一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝しましょう。

また、春整枝後は防霜対策が必要となります。計画的に防霜ファンやスプリンクラーの点検・整備を行うなど、対策に万全を期してください。

3 カンザワハダニの防除

防除適期は、ハダニが産卵を開始する平均気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃です。

地域の栽培暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布します。散布前までに、春整枝と裾刈りを済ませておくことで防除効果が高まります。

(新 正仙)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は、暖くなると害菌の繁殖も強力となるため、2～4月頃までには終わらせます。

仮伏せは植菌した種駒の乾燥を防ぎ、初期活着を促進する作業です。菌系の活着・伸長に必要な温度と湿度を保つ必要があり、本県では、地際から50～60cm以下の高さに横積みする方法が多く使われています。ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で

直射日光や風が当たらないように被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰が出来るようにして保温・保湿を図ります。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、良質なしいたけの生産に努めます。

3 採取

発生したしいたけは、5～7分開きの時に日和子（ひよりこ）の状態で採取し、品質の向上に努めます。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないよう丁寧に採取します。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにビニール袋などで密封し、出荷箱等に入れて乾燥した冷暗所に保管し、梅雨時期までの早期出荷を心がけます。

（奥野 慧）

関連情報

◆農作業安全

農業では、傾斜地での作業や路肩が狭い農道での移動など厳しい土地条件下での作業が多く、作業事故のリスクが高くなります。

このため、ほ場や作業場の危険箇所を把握し、地図や見取り図を作成し、リスクを「見える化」することで農作業事故防止に努めましょう。

◆農薬の適正使用

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかりと確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後は、必ず散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

県内においても、過去に残留農薬基準値を超過した事例や、誤った方法で使用した事例が確認されており、十分な注意が必要です。

特に、農薬ラベルの確認不足、隣接ほ場への飛散、散布器具の洗浄不足が原因の事故・基準超過が多いため、細心の注意を払いましょう。

また、国内において、毎年クロルピクリン剤による事故が発生しています。クロルピクリン剤による土壌消毒を行う際は、必ず保護メガネと防護マスクを着用し、処理

後速やかに被覆を行うなど、使用方法を遵守しましょう。

(農業普及技術課)

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、農業普及技術課が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害虫全般	－	<p>いずれの病害虫も、多発してからでは防除効果が劣るため、発生初期の防除を徹底しましょう。また、薬剤抵抗性害虫及び耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用を避けましょう。</p> <p>多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるため注意が必要です。各種病害の罹病葉等は重要な感染源となるため、適宜除去し園外に持ち出しましょう。</p>
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病	やや多 並 並 並	<p>べと病の発生が多くなっています。草勢の低下は発病を助長するため、適正な肥培管理に努めましょう。</p> <p>うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいため、適正な温度・水管理に努めましょう。</p>
	黄化えそ病(MYSV) ミナミキイロアザミウマ	少 やや多	<p>キュウリ黄化えそ病の発病株を確認した場合は直ちに抜き取り、適切に処分しましょう。また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底しましょう。</p>
	タバココナジラミ	やや多	<p>タバココナジラミの発生が多くなっています。本虫は、キュウリ退緑黄化病を媒介するため、特に、改植する場合は、次作に持ち込まないように注意しましょう。</p>
	病害虫全般 (改植時の留意点)	－	<p>ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後に蒸し込みを行いましょ。</p>
	斑点病 うどんこ病	やや多 並	<p>斑点病の発生が多くなっています。多湿条件下で発生しやすいため、施設内の適正な温湿度管理、排水対策を徹底しましょう。発病葉は感染源になるため、できるだけ適葉し、施設外へ持ち出し処分しましょう。</p>
冬春ピーマン	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	並 並 並	<p>ヒラズハナアザミウマは、花の中に生息しているため、薬剤防除は、薬液が花の中にしっかり付着するように行いましょう。多発時は複数回の薬剤による連続防除が必要です。</p> <p>タバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底しましょう。</p>
	冬春トマト	灰色かび病 葉かび病 すすかび病	並 少 多
冬春いちご	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) タバココナジラミ	並 やや多	<p>タバココナジラミの発生が多くなっており、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除しましょう。TYLCVの発病株は、必ず株全体を抜き取りビニール袋に入れて枯れるまで密閉するなどして、適切に処分しましょう。</p>
	うどんこ病	やや多	<p>うどんこ病の発生が多くなっています。多発すると防除効果が低くなるため予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除を徹底しましょう。発病果など被害部は早めに取り除きましょう。</p>
冬春いちご	ハダニ類 コナジラミ類 ヒラズハナアザミウマ	やや少 やや多 やや少	<p>ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなります。コナジラミ類は、今後、気温の上昇とともに活動が活発になります。ヒラズハナアザミウマは、花や果実に寄生し、食害により果実品質が低下します。いずれの害虫も低密度時に防除を徹底しましょう。</p>
	<p>1) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) 病害虫防除肥料検査センターの HP は、QR コードから閲覧してください。</p>		